

34.『交響曲第九番』への想い

医事万華鏡

クリスマスのイルミネーションが眩しい季節になりました。クリスマスチャンではなくとも、日本人の多くにとつてクリスマスは特別な「イベント」です。大人になった今でも、幼少期に体験した彩り豊かな世界に郷愁を感じてしまうのは私だけではないでしょう。

さて、12月と言えばクリスマスと並んで『交響曲第九番』、通称『第九』も私にとって大きな存在です。今や年末の風物詩ともなった日本各地で開催されるその大掛かりなコンサートは、多くの人の心を惹きつけて止みません。私にとつても『第九』は、学生時代に歌うことを通じて「音楽」を共有した原体験でもあります。

言うまでもなく『第九』は、ドイツの作曲家でありピアニストでもあったルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770～1827）が作曲した、9番目にして最後の交響曲です。特に第4楽章は、独唱および合唱を伴って演奏され、歌詞にはシラーの詩『歓喜に寄す』が用いられています。ロマン派の詩人であったシラーが書いた詞にいたく感動したベートーヴェンが、曲をつけようと思い立ったのがきっかけだそうです。

ところで、この『第九』を含めたベートーヴェンの作品は、一般的に古典派音楽の集大成かつロマン派音楽の先駆けとされています。ただ私はそこに反・啓蒙主義や感情の解放、外国の模倣でない国民文学の創造を目指した革命的国民文学運動・シュトウルム・ウント・ドランク（＝疾風怒濤）

（1767～1785）の特長をみています。この運動は文学運動であったとはいえ広く芸術活動に影響を及ぼしたため、ベートーヴェンの作品に底流する型破りでありながらも古典的な完成形を目指したその「精神」は、やはり古典でもロマン主義でもなくシュトウルム・ウント・ドランクの特性を如実に表しているように思うのです。

そんな疾風怒濤を生きたベートーヴェンのデスマスクを前にした哲学者の和辻哲郎は、「それは人類の悩みを一身に担いおせた悲痛な顔である」「この顔こそは我らの生の理想である」と倫理的な面を強調しました。

人間の普遍的な苦悩や情熱を作品の中で表現したベートーヴェン。彼は同時にその人一倍波乱万丈な人生ゆえ甘受せざるを得なかった苦悩を、創造活動を通じて昇華しました。その作品の中に体现された心象風景の中に何をみるかは人それぞれでしょうが、奇しくもコロナ禍という未曾有の事態を生きたなければならない今であればこそ、強い共感を覚える方は多いように思われます。年末、これまでとは違った角度から『交響曲第9番』の世界観を堪能されてみてはいかがでしょうか。うか。

（JMS主幹・野村元久）

